

# 黒滝ガイド

人口 40人 (男24 女16)  
世帯数 25  
(黒滝、桑ノ川、大改野、中ノ川合計  
4月30日現在住民票による)

## 紹介します黒滝の山菜料理

### 《ふきの煮物》

1. 採れたての若いふきを、塩一つまみ入れた熱湯にさっとくぐらせ水を取り、皮をはぎ食べよい長さに切る。
2. 昆布と雑魚のだしで煮て、みりんと醤油で味付けするだけ。

### 《うどの酢の物》

1. うどは丸ごと、塩一つまみ入れた熱湯でさっとゆでる。
2. 元の方だけ皮をはぎ、まわりの太い部分は指でさく。柔らかい枝や葉も全部4cmくらいにちぎる。包丁は使わないのがコツ。あとは、白みそ、ごま、酢で和える。酒の肴にどうぞ。

## 黒滝青少年自然の家



旧黒滝小学校の教室を使っの宿泊や、校庭での野外キャンプ場として無料で利用できます。原則として、貸し出しは1回1団体としています。ご利用、お問い合わせは、南国市教育委員会社会教育課(☎2111内線321)まで。

## 黒滝おすすめ教策コース



# 自然

がまねく

# 黒滝の夏

南国市の最北部黒滝地区は、国道三十二号線から夫婦で西におれて車で約三十分。林業が盛んで、かつては酒場や映画小屋まであったというこの地も、現在は過疎化が進み、人口減少が著しい。しかし、そこには観光ガイドなどあまり紹介されていない豊かな自然が数多く残されている。最近では別荘らしき建物も数棟建ち、「南国の小軽井沢」といった趣もある黒滝周辺を訪ねてみた。

### 神秘さを感じる瀬戸の滝

桑ノ川の上流にある瀬戸の滝は、この地区一番の見どころである。うっそうと老木がおい茂り、昼までも薄暗い岩間から、高さ約三十メートル、水量豊かな見事な滝がかかっている。どんな夏の暑い日でも、ここに来れば避暑気分が満喫できる。澄みきった清流を手にとり口に含んでみると、冷たい水の味がひとときわ涼かった。

### 自然の芸術鳥居杉

次に訪ねたのが桑ノ川の鳥居杉。樹齢三百

年といわれる二本の杉の枝がつながり、生きた鳥居のようになっている。杉の胴回りは約六メートルあり、大人三人が手を広げても囲いきれないほどの大木である。この杉の根元で真っ白いカニを見つけた。サワガニの一種で、煎じて飲むと肝臓病に効くという、平地では見ることのできないカニであった。

### 家族やグループで行きたい

### 黒滝青少年の家

黒滝橋のもとで昼食をとっていると、池元の吉川美津さんが黒滝の天然水を届けてくれた。黒滝青少年の家は、昭和五十一年に廃校となった黒滝小学校を利用した施設で、宿泊可能、キャンプ場にもなり、黒滝地区の拠点として活用できる。自然に恵まれた南国市の子供たちも、黒滝の大自然にふれ合ったことのある人は少ないであろう。ここを拠点に穴内川、鳥居杉、瀬戸の滝へと足を伸ばせば、森林が約半分を占める南国市の再発見が可能である。



吉川芳富さん

以前本紙に「さわやかさん」として登場いただいた吉川芳富さん。訪れたこの日は、花畑の手入れや家の周囲の片付けなどしていた。吉川さんは若いころ、この黒滝から約5km奥地にあった本山管林署中ノ川事業所に勤めたり、戦時中は近衛歩兵連隊に入隊し皇居の警備に任じ東京大空襲も経験。戦後は郷里黒滝で農林業に従事しながら多くの役職に就き、地区の発展のために努力を続けた。「昔は山を開いて鹿畑農業が行われていましたが、大正6年国見森林組合が創立されて、植林が奨励され、林業が盛んになりました。これは木材を産出するだけでなく、水源かんよの大きな役割を持っています。今もこの山間地帯は南国市の飲料水、農業用水、工業用水の確保に大きく貢献しています」次々と語る吉川さん。二十数年間南国市のし尿処理を引き受けてきた黒滝。山紫水明の里である黒滝。この黒滝に南国市政の配慮を期待する思いが、吉川さんの言葉にあるように思われた。



吉川美津さん

さんとして勤められ小学校廃校の年はちられ、たった一人のか。胸が熱くなるお部落が管理すること昨年夏裏山の雑木をさせたそう。若いのが出来るうちにやが部落みんなの合言まれた山の、緑が、ぐいすの音がどこか来る。山菜も豊富での庭にぜんまいが干附まれての暮らしの中知恵がある。川辺で黒滝自慢の「おいしくれた。お・い・し元気者の吉川さんにあるかもしれない。

源!とした細身。坂道を走るように歩く。元気者だ。黒滝青少年の家を案内してくれた吉川美津さん。吉川さんは市内の小中学校の用務員でしたが、黒滝ようこの学校にお卒業生を送られたと話。市から頼まれてになった青少年の家。切り倒し、スッキリ力がないので自分たちがおかねければ。葉どか。若葉に包み音がうれしい。うらともなく聞こえてくる。吉川さんの家してあった。自然には昔からの生活の弁当を開いていると、「い水」をくんできて「い一言につくる。秘訣はこんなところ



吉川茂隆さん

5月初旬の昼下がりにキャタピラの音が新緑の山峡にこだまして、吉川茂隆さんの運転する木材運搬機が黒滝の林道を走って来た。「若い者はみんな山を下りて、今は私たち老人ばかりになりました。しかし、ここを出るつもりはありません。そうして黒滝で生活する以上は山と木を片時も忘れることはできません」エンジンを止めた吉川さんは、まほを紅潮させ登んだ瞳で、時には杉の造林を指差しながら語る。昭和30年代初めに下流にダムができ、立ち退きで多くの人々が黒滝を去って行ったのが過疎の始まりで、今ではわずかに「戸が助け合って暮らしているという。日本建築に欠かすことのできない日本の杉、ひのきが再び脚光を浴びることを信じている。情を渡る風の音も、谷川を流れるせせらぎの音も私の人生の応援歌である。吉川さんの力強い言葉が続く。やがて木材運搬機のエンジンを止めて去っていく吉川さんの背中には、山の男の意地がみなぎっていた。



▲ 自然の不思議な発見  
せしめる神秘的な鳥居杉



▼ 中ノ川のわき水  
清々とした水が流れてくる



▲ 黒滝の折戻り滝は、昔は「黒滝の折戻り」と呼ばれていた。昔は「供えのたまたまちまき」になって浮かんできたといわれている。昔の黒滝の風景